

類聚名義抄の出典研究の現段階

池田 証寿

一 緒言

類聚名義抄の研究は、近時隆盛の感がある。年間数本の論文が確実に公刊されているし、訓点語学会や国語学会でも類聚名義抄に関わる研究が年に一・二件は発表されている。これは主要な諸本（図書寮本・観智院本・蓮成院本・高山寺本）について複製が出そろったことが関係しようが、かつて岡田希雄著「類聚名義抄の研究」（一條書房、一九四四年）が刊行されたところに比べ、格段の進展が見られるのは喜ばしいことである。このような状況のなかで、一昨年、望月郁子著「類聚名義抄の文献学的研究」（笠間書院、一九九二年）が上梓された。望月の近著は、著者自身の意志によってまとめられた類聚名義抄に関する初めての研究書である。岡田希雄の著書は遺稿集であったのであり、この点に類聚名義抄の研究の広がりを感じる。

筆者は、たまたま望月の著書に対する書評を執筆する機会を持ったが（国語学第一七三集、一九九三年六月）、その際に類聚名義抄の研究史を整理する必要を痛感した。ここでは、類聚名義抄の出典研究にしばって、その研究の現段階を整理し、今後の展望を占ってみたいと思う。以下、主要な研究を見ていくが、漢字音は沼本克明「平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究」（武蔵野書院、一九八二年）などで詳細な議論が展開されているので省き、漢文注と和訓の問題を中心とする。

二 図書寮本の出典研究

出典研究を中心に見ていく理由は、こうである。辞書は先行するさまざまな書物を類聚し、それらに取捨選択を加え、時に編者の見解を織り混ぜて成り立つ。したがって先行資料と当該の辞書との差と見極めることで、その辞書の性格が明らかになる。辞書を言語資料として用いる場合にも、先行資料をそのまま引用転載しているのか、その当時の語形に改変を加えているのか、重要な問題となるのである。図書寮本は出典明示の漢字字書であり、可能な限りその出典を解明しなければならぬ。以下、各氏の研究を紹介するが、その特徴を、筆者の理解にしたがって括弧の中に要約した。

（一）橋本不美男の研究（原本類聚名義抄論）

- ・「図書寮本類聚名義抄解説」（「図書寮本類聚名義抄」宮内庁書陵部、一九五〇年）
- ・「図書寮本類聚名義抄出典索引」（書陵部紀要一号、一九五二年）

図書寮本の研究の原点。「この図書寮本は未精撰本に属する一転写本であり、緋衣階級を対象として、漢字よりも漢語（語彙）を主とした。これは或は未精撰、草稿本の一過程或る状態を指示するも

のかもしれない 字書であり、観智院本等は図書寮本系が一応の推敲を了へた後、前者の目的とは別に、純粹な漢和字書としての体裁に改編したものではなからつかといふことになる」(解説)との結論は確固たるものがある。また書誌に関しては解説が唯一の文献。ただ出典索引は短時日に作成されたためか、誤認・遺漏が目立つのは残念。

(2) 吉田金彦の研究(辞書音義注疏類出典論)

- 「図書寮本類聚名義抄出典攷(上)」(訓点語と訓点資料第一輯、一九五四年)
- 「図書寮本類聚名義抄出典攷(中)」(訓点語と訓点資料第三輯、一九五四年)
- 「図書寮本類聚名義抄出典攷(下)」(訓点語と訓点資料第五輯、一九五五年)
- 「類聚名義抄小論」(国語国文第二四卷第三号、一九五五年)
- 「類聚名義抄の展開」(訓点語と訓点資料第六輯、一九五六年)

当初、図書寮本の研究をリードした吉田の貴重な論考。何れも熟読すべきものである。図書寮本所引の辞書音義注疏類の出典の全貌を明らかにし、それに基づいて図書寮本編纂の目的を論じた点に特徴がある。

(3) 築島裕の研究(和訓源流論)

- 「訓読史上の図書寮本類聚名義抄」(国語学第三七輯、一九五九年)
- 「国語史料としての図書寮本類聚名義抄」(図書寮本類聚名義

抄」勉誠社、一九七六年)

タイトルから知られるように国語史の資料としての図書寮本の重要性を明確に打ち出した研究である。訓点本・古辞書・訓注類との比較から、図書寮本の和訓(萬葉仮名・片仮名)が原典に忠実な引用であることを証明。また「諸書引用の順序に或る程度の法則性があるのではないか」(築島一九五九)という点は、後に宮澤俊雅が発展させることになる。

(4) 小松英雄の研究(声点機能論)

- 「和訓に施された平声軽の声点」(国語学第二九輯、一九五七年)
- 「図書寮本類聚名義抄にみえる特殊な注音方式とその性格(上)」(訓点語と訓点資料第一〇号、一九五八年)
- 「語調史料としての類聚名義抄」(東京教育大学文学部紀要 国文学漢文学論叢 第九輯、一九六四年)
- 「日本声調史論考」(風間書房、一九七一年)
- 「上東型名詞存否論の帰結」(国語学第一〇九集、一九七七年)

仮名の左下少し上に加えられた平声軽点の発見はあまりにも有名。これにより平安末期の語調体系を書換えた功績は大。また声点は本文の一部であり「師説」「証拠」の有無を標示するという、声点の機能に関する論は、従来看過されていた点を突く重要な指摘で、後に望月郁子が観智院本についてこの点を種々検討して行くことになる。文献の背後にある加筆者や作者の意図を鋭く抉り出す論理のキレには定評がある。「<等価の関係にある音注を併記しない>という方針がたらぬかれている」(小松一九七一)という指摘は、出典論にも密接に関係してくる。

(5) 宮澤俊雅の研究(主要八出典採録序列論)

- ・「図書寮本類聚名義抄に見える篆隸万象名義について」(訓点語と訓点資料第五二輯、一九七三年)
- ・「図書寮本類聚名義抄と妙法蓮華經釈文」(松村明教授還暦記念国語学と国語史、明治書院、一九七七年)
- ・「図書寮本類聚名義抄と倭名類聚抄」(松村明教授古稀記念国語研究論集、明治書院、一九八六年)
- ・「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義」(訓点語と訓点資料第七七輯、一九八七年)
- ・「図書寮本類聚名義抄と法華音訓」(北大国語学講座二十周年記念論輯辞書・音義、汲古書院、一九八八年)
- ・「図書寮本類聚名義抄の注文の配列について」(小林芳規博士退官記念国語学論集、汲古書院、一九九二年)

宮澤の研究の特徴の一つは徹底した全数調査主義。図書寮本所引の「玉」が篆隸万象名義からの孫引きかもしれないとの指摘(宮澤一九七三)は、言われてみればなるほどと言わざるを得ない。図書寮本と妙法蓮華經釈文、倭名類聚抄、篆隸万象名義、法華音訓との関係を取上げたのが私が主要八出典採録序列論と名付けた一連の論考。図書寮本の主要な八出典(玄応撰一切経音義・玉篇・篆隸万象名義・真興撰大般若経音訓・源順撰倭名類聚抄・東宮切韻・中算撰妙法蓮華經釈文・慈恩撰書、以上頻度順)を対象として、それら内容が図書寮本にどれだけ採録されているか、また各出典に同じ内容の首注・釈義がある場合、図書寮本がそれをどう扱っているか、を調査し、一定の順序に従って採録していることを実証または推定した論である。「名義抄に於ける釈文引文の取扱い方から、主要な出典の採録序列は、内典釈を先に、外典釈を後に、例えば慈恩・弘

法・玄応・中算・真興・東宮切韻・倭名類聚抄のように並べられるかと思われる」(宮澤一九七七)という推定を、宮澤(一九八六)以下の論考で「それぞれの資料と名義抄の対照調査をした上で」「確定」(実証)していったのである(中算と玉篇・篆隸万象名義は宮澤(一九七七)でほぼ実証済)。

- ・「法華釈文並類聚名義抄引慈恩釈対照表」(北大国語学講座二十周年記念論輯辞書音義、汲古書院、一九八八年、池田証寿・小助川貞次・浅田雅志・宮澤俊雅の共著)

この対照表は、採録序列研究の手の内をよく見せてくれる研究である。筆者は、この研究に参加したものの、その方法や意義をある程度理解するのは、玄応音義について同様の作業を行った段階であった。

(6) 望月郁子の研究(慈恩玄応優先論)

- ・「類聚名義抄の文献学的研究」(笠間書院、一九九二年)

「訓点語と訓点資料」や静岡大学の研究報告に発表した論考等を土台に一書としたもの。名義抄の改編を論じた本論第一部の目を掲げておく。

第一章『類聚名義抄』改編のねらい―観智院本言部の漢文注を手がかりに―

第二章『図書寮本』類聚名義抄』における『篆隸万象名義』の引用の方法―改編本におけるそれとの対比のために―

第三章『類聚名義抄』の改編事情についての一考察―類聚名義抄』六群成立試論―

第四章「観智院本『類聚名義抄』における『和名類聚抄』の扱い」

第五章「観智院本『類聚名義抄』の和音注―法華経字彙との関連における―」

図書寮本に關係するのは第二章。宮澤俊雅の研究との違いが問題となる論考である。

望月は観智院本（改編本）は篆隸万象名義を中枢に据えることで成立したとの考えを同書の第一章に示したが、この第二章では図書寮本（原撰本）での篆隸万象名義の位置は、どうなっているのかを追究している。図書寮本と篆隸万象名義とを対比し、篆隸万象名義の注文を採録せず慈恩・玄応の注文を採る項目が少なからず存することから、慈恩や玄応の説は空海の説よりも重視尊重されていると結論した。篆隸万象名義と倭名類聚抄を図書寮本の根幹資料と見る立場は、前述の吉田金彦（一九五五）や小松英雄「類聚名義抄を通して見た和名類聚抄の性格」（訓点語学会研究発表、一九七六年十一月、宮澤（一九七七）の注¹⁶による）に示されていたが、このような見方に対する修正意見である。また宮澤（一九七七）で「慈恩・弘法・玄応……」の順序としたことに対する批判でもある。宮澤は出典の「序列は、それぞれの資料と名義抄の対照調査をした上でなければ確定することは出来ない」（宮澤一九七七）と明瞭に述べており、慈恩・玄応の説が弘法大師の説よりも重視されたことを論証するためには、慈恩と玄応の側からの対照調査が不可欠なのであるが、この認識にズレがあるようである。宮澤（一九八七）の注6では、望月の宮澤（一九七七）の理解に対する不満を洩している。誤解を恐れずに言えば、望月は採録順序の推定と確定（実証）とを同じレベルで見ているらしいのに対し、宮澤は推定と確定とを厳密に区別するのである。論としての優劣は自明と思うが、宮澤の論考は簡潔であるため、熟読せねば充分な理解に達しない（少なくとも筆者にとつ

て）。望月の研究は、その方向性や結論に難があるが、宮澤の研究に対する一つの理解の仕方を示したもので、結果的に宮澤の先見性が浮彫りにされたと言える。

（7）山本秀人の研究（熟字項出典論）

- 「図書寮本類聚名義抄における玄応一切経音義引用の態度について」（鎌倉時代語研究第六輯、一九八三年、原卓志と共著）
- 「類聚名義抄における和名類聚抄を出典とする和訓の摂取法について」（広島大学文学部紀要四七、一九八八年）
- 「図書寮本類聚名義抄における真興大般若経音訓の引用法について―叡山文庫藏息心抄所引の真興大般若経音訓との比較より―」（訓点語と訓点資料第八五輯、一九九〇年）
- 「図書寮本類聚名義抄における標出語の採録法について―注文の出典との関連を視点に―」（小林芳規博士退官記念国語学論集「汲古書院、一九九二年」）
- 「図書寮本類聚名義抄における玄応一切経音義の標出語の摂取法について」（鎌倉時代語研究第一六輯、一九九三年）

山本は、後述するように観智院本の出典研究に目覚しい業績があるが、近時、図書寮本についても続々と論考を発表している。山本（一九九〇）では真興音訓の性格やその図書寮本における出典としての位置が確認されている。この論で既に大般若経六百巻の本文（大正蔵経で三冊の分量！）との照合を終えており、その作業に立脚して図書寮本の標出語の採録法や玄応音義の標出語の摂取法を論じている。熟字の標出語を検討対象として、注文に見られた採録の序列は標出語にも見られること（山本一九九二）、玄応音義からの標出語には瑜伽師地論によるものが多いという傾向が認められること（山

本一九九三)を述べる。各出典(慈恩・玄応・中算・真興)および経本文(大般若経・法華経・成唯識論・瑜伽師地論)を対比する方は次に述べる宮澤の「仮説」に立つものといつてよい。

(8) 池田証寿の研究(内典先行辞書後補論)

- ・「図書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について」(国語国文研究第八八号、一九九一年)
- ・「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表(上)」(信州大学人文学部人文科学論集第二五号、一九九一年)
- ・「図書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表(下)」(信州大学人文学部人文科学論集第二六号、一九九二年)
- ・「図書寮本類聚名義抄と干禄字書」(国語学第一六八集、一九九二年)
- ・「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義との関係について」(信州大学人文学部人文科学論集第二七号、一九九三年)
- ・「図書寮本類聚名義抄の単字字書的性格」(国語国文研究第九四号、一九九三年)

筆者は宮澤の方法を玄応音義について適用してみたが、明瞭な結論が出なかった。玄応が弘法より優先されていれば、玄応と同じ内容の弘法の注文は図書寮本に採録されないはずであるのに異例が多い。逆に、弘法が玄応より優先されていれば、弘法と同じ内容の玄応の注文は図書寮本に採録されないはずであるのに、これまた異例が少なくない。そこで、図書寮本撰者が玄応音義と篆隸万象名義を参照したことが確実な例とそうでない例とに分けて分析した。

1 玄応音義と篆隸万象名義を引く項目

- 2 玄応音義を引かず篆隸万象名義を引く項目
- 3 篆隸万象名義を引かず玄応音義を引く項目

1を見ると明らかに篆隸万象名義は玄応音義よりも優先して採録されている。2は玄応音義の注文が篆隸万象名義の注文にすべて含まれているため玄応音義が全く採録されなかった例である。3は玄応音義の掲出項と注文を採録したものの、篆隸万象名義による増補をしなかった例と考えられる。つまり、掲出項の優先順位は、玄応 弘法だが、注文の優先順位は、弘法 玄応と見たのである。

宮澤の研究方法は、図書寮本撰者が各出典を同時に参照して行ったことを仮説として立て、その上で採録の順序を確定して行ったのである。拙論はこの仮説が成り立たない場合があることを指摘したものと受取ってもらってよい。図書寮本の実際の編纂作業は、作業の効率から考えて、各出典をある一定の順序に従って見て行くこととされたのであろうと推測される。図書寮本撰者が各出典を参照し尽くしていれば、宮澤の仮説できつちりとした結論が出るはずなのである。図書寮本には仏典の音義を単に集成したような部分と字書としての体裁を整えようとした部分とが混在している。この音義と字書の間の揺れのような性格は、図書寮本の草稿本的、未精撰本的性格を端的に示す。と同時に、広益本(改編本)を産み出す芽が既に図書寮本にちらりと顔を覗かせているのである。図書寮本の編纂作業の時間的な順序を明らかにするのは容易なことではないが、そうした視点が必要な段階に来ていると言えようか。

以上の外にも紹介すべき研究は多いが割愛する。なお、筆者が「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義の関係について」の元になる口頭発表を行った時、豊島正之から篆隸万象名義は索引のような役割を果したのではないかとの指摘を受けたが、このような見方は重要であろう。篆隸万象名義索引論である。筆者は篆

隷万象名義の字順に従う「玉篇字順群」と「類似字形群」との関係はどう考えるべきか、明確な考えをつかめずにいたのであるが、「図書寮本類聚名義抄の単字字書的性格」で、玉篇字順群から類似字形群へという考えを纏めてみた。

三 観智院本の出典研究

広益本ないし改編本と呼ばれる類聚名義抄には、観智院本の外に、蓮成院本・高山寺本・西念寺本があるが、唯一の完本である観智院本をもつて代表させることにする。

筆者は、観智院本について一編の論文も発表しただけでなく、気後れを感じるが、望月著「類聚名義抄の文献学的研究」の書評で若干気付いたこともあり、図書寮本と関連する点に留意して、以下卑見を略述しよう。

(1) 岡田希雄の研究(類聚名義抄撰者論)

岡田の「類聚名義抄の研究」(一條書房、一九四四年)の業績は、歴史的なものになった感もあるが、学ぶべき点は多い。この書では類聚名義抄と和名類聚抄との前後関係を明らかにし、その撰者が真言宗関係の僧侶であることを推定した。諸本の系統論には、諸本を充分に参照できなかっただけに問題を残す。ともあれ、和名抄との関係や撰者については、現在ではほぼ常識となった説であるが、それまでは類聚名義抄の撰者は菅原是善(元慶四年880没)とするのが通説であった(筆者の勤務先では類聚名義抄を校費購入すると今でも著者菅原是善とした図書カードを平然と作成してくる)。岡田の論述は時に煩瑣であるが、誤った説を覆すには徹底的な批判が要

求されることを示したものと言えよう。

(2) 築島裕の研究(和訓源流論)

・「類聚名義抄の倭訓の源流について」(国語と国文学第二七巻第七号、一九五〇年)

築島に平安時代の漢文訓読語の研究で大きな業績があるのは周知のところ。類聚名義抄の和訓に訓点本傍訓から採録されたものがあること、その具体的な源泉としては、遊仙窟・文選・白氏文集・日本書紀・祝詞などがあることを実際の訓点本との比較から実証。図書寮本が公刊される以前の研究だが、その論証の方法の有効性は図書寮本公刊後も変わらず、より強まったとも言える。文選については山本秀人が周到な出典論を展開することになる。

(3) 吉田金彦の研究(類聚名義抄参照文献論)

・「類聚名義抄の参照文献」(芸林第九巻第三号、一九五八年)

「観本初稿本編者の手によつて、漢文註(図書寮本の漢文注の意。池田注)を、和訓に翻訳したと思はれる語彙が、相当夥しく指摘できる」とする。望月著「類聚名義抄の文献学的研究」第一部第一章では漢文注の和訓化を述べているが、この吉田の論に触れていない。当然参照されるべきある。望月の著書にはこの手の見落しが時々あり、プライオリティに関わる場合、問題となる。

それはともかくとして、吉田は類聚名義抄の参照文献として、新撰字鏡、広韻、龍龕手鑑の如き字書を挙げる。新撰字鏡は既に佐藤喜代治「新撰字鏡の本文について」(東北大学文学部研究年報第一

号、一九五一年三月)に指摘済みであるが、広韻や龍龕手鑑の如き字書の指摘は重要。広韻は宋版であろうし、龍龕手鑑の如き字書は遼版なのか、宋版なのか、または高麗版なのか不明であるが、いずれにしても版本の字書を参照している点は確かといえようか。字書史を写本の形態の字書のみで考えるのはおそらく不十分で、版本の形態の字書の影響如何ということも念頭に置く必要があるろう。その際、吉田の先見性は評価されてよいと思う。

ちなみに西原一幸に「改編本系『類聚名義抄』・『龍龕手鑑』にみえる「或」および「或作」の字体注記について」(『日本語論究2 古典日本語と辞書』和泉書院、一九九二年)という類聚名義抄と龍龕手鑑に触れる論があるが、吉田の考説は参看されていない。西原は「字様」について精力的に研究を進めており、論の内容には教えられることが多いが、吉田の考説に対して何かコメントがあつてしかるべきであろう。

既に挙げた論文だが、

・「類聚名義抄の展開」(訓点語と訓点資料第六輯、一九五六年)

の中で吉田が以下のように述べた点は注意したい。

即ち、図書寮本は観智院本にとつて祖本ではあるが必ずしも藍本ではなく、高山寺本 観智院本 西念寺本、蓮成院本の種類とはまた自ら異なつてゐること論を俟たない。岡田氏の紹介された靈鷲院六帖字書と、図書寮本との前後関係も今のままでは何とも致し方がないのであるが、私見では、図書寮本と観智院本との間に(慈念本や顕慶本以外にして)少くとも二本程度の存在が必要であるか、或いは観智院初撰本は図書寮本別本にたとも考えられるのである。

同様の見解は貞苺伊徳「日本の字典その一」(『漢字講座2 漢字研究の歩み』明治書院、一九八九年)も「所拠本は現存の図書寮残本とは少しく異なるものであつたと推察される」と述べている。

しかるに、望月著「類聚名義抄の文献学的研究」では

・ 慈念の写したもとの本(直接の被写本)、即ち慈念のいう「作者自筆草本」を観智院系原本、現存図書寮本を図書寮系原本とする

・ 観智院系原本編纂の作業は、図書寮本を直接の下敷きとして行われた

という作業仮説を設定し(同書一四八頁)、これを前提として類聚名義抄の 改編 を論じているのである。作業仮説を設定するのは無論方法として正しい。しかし、その作業仮説の検算を行わないのは、如何であろうか。吉田や貞苺は、観智院本の所拠本が図書寮本と少しく異なるとして、どの程度異なるのか、それを解明するのが一つの課題だと述べているのではないか。

(4) 酒井憲二の研究(類似字形配列論)

・「類聚名義抄の字順と部首排列」(『本邦辞書史論叢』三省堂、一九六七年)

観智院本と玉篇とが密接な関係にあることは、観智院本の篇目に添えられた凡例の「立篇者源依玉篇。於次第取相似者置隣也。」という一節から知られる。この「取相似者置隣也」の部分に一説を提示したがの酒井憲二である。すなわち「取相似者置隣也」は部首の配列ばかりでなく部首内の字順にも認められることを明らかにしたのである。

(5) 貞苴伊徳の研究(玉篇字順群論)

- 「観智院本類聚名義抄の形成に関する考察その1字順をめぐる問題」(第四八回訓点語学会研究発表、一九八三年)
- 「日本の字典その1」(「漢字講座2 漢字研究の歩み」明治書院、一九八九年)

貞苴は一九八三年の口頭発表で、観智院本に玉篇ないし篆隸万象名義と同じ字順の「玉篇字順群」が存在することを指摘、「玉篇」との関係は字順の点から実証した。各部の前半に類似字形による配列が見られ、中央より後に玉篇字順群が見出されるとするなど、観智院本の形成に関する重大な提言であった。ただ慎重な貞苴はこれを論文として公表せず亡くなった。その考説の一端は一九八九年刊行の概説的な文章に示されるが、ここでは「一種の玉篇」によつたと述べるのみである。宮澤は一九八三年の発表を「広益玉篇との関りを見事に論証する」(「国語研究資料」国語学第一四五集)と紹介。口頭発表時のプリントを見ても、観智院本の依拠した玉篇が広益本系統の玉篇であったことは十分に納得できる。

(6) 望月郁子の研究(篆隸万象名義中枢論)

「類聚名義抄の文献学的研究」第一部第一章『類聚名義抄』改編のねらい—観智院本言部の漢文注を手がかりに—において、改編本類聚名義抄は篆隸万象名義をよるべき文献の中枢にすえて編纂されたと論じる。これを論証するために、観智院本言部の語義標示の漢文注と、図書寮本・万象名義・原本玉篇と対比している。しかし前述した貞苴の論考がある以上、宋本玉篇(大広益会玉篇)との対比が絶対に必要である。篆隸万象名義を中枢に据えたとする点が的外

れとは言えないが、篆隸万象名義の唯一の古写本である高山寺本を見て分かるように、改編本編纂者の利用した篆隸万象名義にも誤写がある程度存したであろう。複数の玉篇系の字書(原本玉篇・宋本玉篇・篆隸万象名義)を参照しながら、改編本を作成していったことを考慮してもよいのではないか。その際、篆隸万象名義にどの程度重点を置くかの判定は難しい問題。篆隸万象名義が中枢の文献であり、したがって改編本の編纂は真言宗のための字書作りであったとの結論はユニークだが、論理が飛躍。ついていけない。

望月は、図書寮本に見えず観智院本に見える項目を「改編新項目」と呼び、篆隸万象名義・原本玉篇と対比している。このデータは興味深い。というのは、この「改編新項目」の中に、(a)和訓に声点を施した例があり、(b)篆隸万象名義の訓注と一致する例が確かに存するのである。声点は「師説」「証拠」のあることを標示するという声点の機能からすると、(a)の例は、何かしかるべき「師説」「証拠」に基づくと考えねばならない。「改編新項目」の「師説」「証拠」とした文献とは何か。それは改編本編纂者が利用した原本系の類聚名義抄そのものではなかったか。とすれば、望月の作業仮説 観智院系原本編纂の作業は、図書寮本を直接の下敷きとして行われた は成り立たない。同様に、(b)の例は、改編の際に加えられたかもしれないが、改編本編纂者が利用した原本系の類聚名義抄に既に存したとも考えられるのである。それを確定するのは難しいが、類聚名義抄の出典研究に課せられた一つの課題であろう。

(7) 山本秀人の研究(熟字訓出典論)

- 「改編本類聚名義抄における文選訓の増補について」(国文学攷第一〇五号、一九八五年)

・「改編本類聚名義抄における新撰字鏡を出典とする和訓の増補について―熟字訓を対象として―」（国語学第一四四集、一九八六年）

山本は改編に際して増補された類聚名義抄の和訓の典拠を、相当に多量な文献との対比に基づき明らかにし、しかも改編本諸本の系統にも周到な目配りをするなど、最近の類聚名義抄の出典研究として出色。両論とも熟字訓を手掛かりとしているが、これは単字訓の場合に出典を特定するのが極めて困難であるからであり、考え得る最善の方法であろう。山本は類聚名義抄についてエネルギー論を論を発表しており、この外にも有益な論考が多い。

以上の外、漢字音その他に関して紹介すべきかとも思うが、割愛する。

四 結言

観智院本は、出典を明示した字書ではない。これが図書寮本との決定的な相違点なのであるが、このことは出典の特定を困難とする大きな要因となっている。先学の研究によると、ある出典に特有の本文（熟字・異体字の注記形式）や和訓、また出現順序の一致などが有効であることが分かる。

筆者は、玉篇（原本玉篇・篆隸万象名義・宋本玉篇）データベースを作成し、これに観智院本の所在データとその他の付加的データを加えることによって、観智院本の形成過程を解明してみたいという構想を持っている。玉篇データベースについては中間報告を行ったが、「篆隸万象名義データベースについて」国語学会平成五年度秋季大会研究発表、一九九三年十月三十日、於北海道大学学術交流会館、これと本稿をあわせて、筆者の観智院本研究の序としたい。

〔付記〕本稿は第二三回北海道国語研究会（一九九三年七月三十日、於北海道大学文学部）での口頭発表に基づく。

（初出、人文科学論集第8号、信州大学人文学部、一九九四年三月）